

今年のカレンダーのテーマは、昨年につき「宗祖親鸞聖人に会う」です。

今年、親鸞聖人ご誕生850年を迎えることから、あらためて親鸞聖人に会う機縁になることを願い、親鸞聖人の教えにふれた先達の方々のお言葉の中から選定されました。

表紙 横超慧日（おおちょう えにち）

親鸞聖人の出現は

私一人のためであった

親鸞聖人にとっては、阿弥陀如来の出現はまさに「親鸞一人がため」と表現するほどの出来事であり、またその聖人がご誕生にならなければ今日の私たちが本願の真意に会うことはできなかった。

1月 信楽峻麿（しがらき たかまる）

この世のことは 何事も何事も

お念仏の助縁

ただ南無阿弥陀仏と申す、その響きを通して自身の心の奥底に聞こえてくるものに耳を傾け、それを味わうことが大切。称名即聞名を通して日々の生活の中で「めざめ」をいただく。

2月 稲城選恵（いなぎ せんえ）

世の中に 最も度し難いものは

他人ではない この私

信心を得るとは、「仏願の生起本末」を聞いて「疑心」がないこと。それをよそごとのことととらえてしまう私がいる。自分こそが不確かな存在。

3月 浅原才一（あさはら さいいち）

こころにじごくがあるよ

ひにちまいにち ほのをがもゑる

他人の罪やあやまちは見えるけれども、自分の罪やあやまちには気づかない。地獄の世界は自身の生きざまを顧みて、その奥底にひそむ自己中心の根性に気づく人が感じる自覚的世界。

4月 二階堂行邦（にかいどう ゆきくに）

仏法の鏡の前に 立たないと

自分が自分になれない

忘れ物をして部屋に戻ったけど、何のために戻ったか思い出せないまま、また部屋を出る。自分とは何かに気づくことなく過ごしている自分が阿弥陀如来に出会いによりありのままの自分を知る。

5月 安富信哉（やすとみ しんや）

南無阿弥陀仏とは

言葉となった仏なのです

阿弥陀如来は、私たちを救う、ただそれだけを実現するために仏と成られた方。自らのすべてをもって、私たちを救うためにはたらいっている仏。阿弥陀如来が活動されるすがたが南無阿弥陀仏。

阿弥陀如来は、自分中心の心に振り回される「煩悩病」を患う私たちに、南無阿弥陀仏を処方してお救いくださる。

6月 小山法城（こやま ほうじょう）

信は 如来の生命なり

浄土真宗の信心とは、「阿弥陀如来の側に私を信じさせるだけの力がある」ことによって、私が「信じずにはいられない」ようになった心。

7月 利井明弘（かがい みょうぐ）

正しいものに遇って

正しくない自分を 知らされている

お念仏の教えに出会うことで、この私がいかに煩惱を抱えて自己中心的な生き方をしているのか知らせていただく。そのような私を「必ず救う」と喚びかけてくださる阿弥陀様におまかせして安心の中を生きていく。

8月 曾我量深（そが りょうじん）

われもたすかり 人もたすかるというのが
仏教の教え

私たち凡夫は自らの力で往生の種を作ることはできず、あらゆるものの救済を誓われた阿弥陀さまのご本願により、われも人も救われていくということ。

9月 石田慶和（いしだ よしかず）

「まこと」のひとかけらもない私に
仏さまから差し向けられた「まこと」

お念仏は阿弥陀さまがこの私に至り届いてくださっているすがた。自分の価値観に固執し、自分こそ正しいのだと、ときに他者を傷つけるような生き方をしている、そのような私のすがたに涙されたのが阿弥陀さま。

10月 坂東性純（ばんどう しょうじゅん）

念仏というのは
私に現れた仏の行い

念仏は私のはたらきではなくて、阿弥陀さまの具体的な現れ。「念仏する」という行いは、私の行いであるまが阿弥陀さまの行い。

11月 金子大榮（かねこ だいえい）

生の抛りどころを与え 死の帰する
ところを与えていくのが 南無阿弥陀仏

宗教に遇うということは、自分が何者であるかが知らされること。そして、自分の考えを中心に生きてきた生き方が、教えを中心に生きていく生き方へ転換される。

12月 梯實圓（かけはし じつえん）

一人一人がお浄土を飾っていく
一輪一輪の花になる

この世に咲いた花は必ず滅んでいかなければならない。求むべきは滅ぶことのない真実なる浄土なのだ。浄土に生まれ往くいのちを今生きているのであって、決して滅びゆくいのちを生きているのではない。